

或本の歌に曰く

二二三番

うつそみと 思ひし時に たづさはり 我が二人
見し 出で立ちの 百枝槻の木 こちごちに 枝
させるごと 春の葉の しげきがごとく 思へり
し 妹にはあれど 頼めりし 妹にはあれど 世
の中を 背きしえねば かぎるひの もゆる荒野
に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちい
行きて 入り日なす 隠りにしかば 我妹子が
形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取
り委す 物しなければ 男じもの わきばさみ
持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま
屋のうちに 昼は うらさび暮らし 夜は 息づ
き明かし 嘆けども せむすべ知らに 恋ふれど
も 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽易の山に 汝が
恋ふる 妹はいますと 人の言へば 岩根さくみ
て なづみ来し 良けくもぞなき うつそみと
思ひし妹が 灰にていませば